

## 一、放光院境内の石造物遺跡

放光院（別称：茶堂）の始まりは、寛政年間（一七八九～一八一〇年）に一道真心が創建した。境内には元禄十五年（一七〇二）の名号碑も存在するなど、茶堂創建よりも古い紀年銘を持つ石造物が見受けられる。こうしたことから茶堂創建以来、周辺にあった道標などの石碑群が茶堂境内に集められたものと推測されるが、これらの古い石碑群の存在は、この地点が茶堂創建以前から巡礼道の要地であったことを伺わせるのである。

境内に散在する石造物四十八基、内板碑形石仏や舟形光背式の石仏は三十四基である。

境内の石造群一覧にあるように番号を付した石仏遺跡について、石仏の類別・年代・刻まれた文字の他に若干の解説を加えている。編集にあたっては石造物に関わる多くの資料・文献を参考にさせて戴いた。境内入り口から、概ね右周りの方向で記載している。

### ①寛文十三年（一六七三年）道しるべ

夫婦銀杏の大木の傍にひっそりと立つ高さ七十二cm、幅四十cmの砂岩系自然石に行書体で刻まれている。「これより左 巡礼道」成相まで十里あり」とある巡礼道とは、西国三十三ヶ所観音巡礼道のこと、第二十七番札所である

播磨の書写山円教寺から第二十八番札所で天橋立を見下ろす成相山成相寺に至る遍路道を、地元では「なりあい道」と呼んでいる。



寛文拾三年丑七月六日  
こ礼よ里ひたり志由ん来い道  
なりあいまで十里あり

茶堂前から郷土資料館前・水上・門垣（かずか）・才谷を経て、小坂峠越の順路で丹後へと向かったようである。この道標が建てられたのは寛文十三年とあり、道標としては早期の建立である。ちなみにこの年の九月に「延宝」と改元される。茶堂には他にも巡礼道標が二基ある。

(1)

## ② 道標を刻んだ石仏

舟形光背に地藏立像を薄肉彫りしたもので、尊像の脇に「道しるべ」を刻んでいる。方向は刻まれていないが、いずれこの付近の道ばたに、「なりあい」を指向往して建てられていたものであろう。この石仏に年号はなく、建立年代は分からない。茶堂を出て東、旧道を一〇〇mあまり行くと道ばたに石仏が二基建っている。その中の一基に道標が刻まれている。



なりあいみち  
諸善男女